
はい、私が噂の変態土魔術師です。

BENI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はい、私が噂の変態土魔術師です。

【Nコード】

N3644Y

【作者名】

BENI

【あらすじ】

ある日普通に生活していた青年が異世界へ飛ばされてしまう。

魔物が闊歩するファンタジーな世界で、土魔法を手に裸一貫思春期真っ盛りの青年が変態的発想で突き進む。

変態ですがエロではなくクレイジーな変態です。

最初は普通の18歳ですが徐々に変貌していく話なので、よかつたら応援よろしくお願いします。

始まりは突然に

ある日地球から異世界へ飛ばされた青年は、抑圧してきた色々なものから解放され自分のやりたいように生き抜いていく。
これはそんな青年のお話である。

(汝に神の祝福あれ…)

「ん…」

瞼を開く。

「あ、あれ？ここは…？」

キョロキョロ辺りを見回してみるが一面草木が生い茂っており、森の中だということが伺える。

「えっと…「コドコ」？」

「名前は誠慈、歳は18、福岡生まれの福岡育ち。」

自分自身で確認するように呟いてみるがどうやら記憶喪失とかではないようだ。

念のため頬をつねってみるがたしかに痛い、夢でもないな。

自室で寝てたのに朝になったかと起きてみれば知らない森の中、勿論俺の家は森の中にはないしそんな特殊な環境では生まれ育ってはいない。

平凡な家庭に生まれ育った平凡な青年それが俺だ。

もう一度辺りを見回してみるが森の中ということしか分からない、ふと自分の服装を確認してみても上下黒のスウェット。

いつもの寝間着である。

これからどうしようかと迷いポケットに手をつ突っ込んだところで指先に何か触れる。

掴んで取り出したら紙が一枚入っていた、広げてみる。

退屈な世界に飽きた貴方を異世界に送ってみました、異世界ライフ存分に楽しんでみてください。特典は土魔法です。

ちよつと待つてほしい、異世界とか魔法とか色々突っ込み所が多いがもし、いやもし仮にあくまで仮定として本当なのだとしたら驚いていいことなんじゃないだろうか？

本とか好きでファンタジーな世界な話とか色々読んだりはしてたがいざここが異世界ですとか言われても全く信じられない。

というかあの手紙の主は誰だよ、手紙をひっくり返したりしてみる

がどこにも名前のようなものは書かれていない。

たしかに異世界とか魔法のある世界で冒険なんてできたらカッコいいだろうなんて本を読みながら思ったこともあったけど、それはあくまでこんななんあったらいいなあというような空想の上での話だ。

まさか自分がそんなものに騙されるなんて

「アースニードル!!」

ズサズサツ

前に突き出した手のひらから円錐形の小ぶりなものが発射され近くにあった木に当たり、いくつも突き刺さる。

誠慈は右手を突き出したまま固まっていた。

(マジかよマジかよマジかよ!なんか手から出たよ!)

小走りにその突き刺さった木に近づいて確認するとたしかに円錐形のもの刺さっている。

最初は石かと思ったが触ってみるとどうやら硬く固められた土のようだった。

ただこの硬さなら威力も石と大差ないだろう。

「マジか…」

実際確認すると少しショックでもあった。

「魔法が使えるってことは異世界っていうのも間違いないんだろな。」

「俺どうしよ…」

森の中で一人呟く誠慈だった。

始まりは突然に（後書き）

主人公一人称に挑戦して書いてみます、よかったら評価お願いします。

確認の大事さ

とりあえず、色々確認してみようと思う。

（さっきは出るとは思わずアースニードルなんて適当に言ったら魔法が発動したけど言葉はなんでもいいのかな？）

「トゲドゲ棒！」

「なんか先つちよが鋭いやつ！」

言葉は違えど先程と同じ円錐形の土の塊が発射される。

試しに左手でもやってみたら出来た。

（なら、これならどうだ？）

「アースボール」

左手から、バレーボール位の土の球体が飛び出し真っ直ぐ進むと木に当たり半ばからへし折った。

（形を変えられるってことはイメージが大事なのかな？）

その場にしゃがむと両手を地面につけ唱える。

「アースウォール！！」

叫んだ瞬間、誠慈の足元が膨らみはじめ瞬く間に円柱状の大きな塔のようにになると誠慈の体を塔の上に持ち上げる。

「うお高ええ眺め最高おお。」

地上から100m程の高さから辺りを窺うと遠くに村のようなものが見えた。

「おお人いんのかな？とりあえず、あそこ目指そう。」

今から歩いていけばなんとか夜までには着けそうな距離だった。

村の方向を確認して塔を小さくさせ地面に降りると歩きだす。

2時間程歩きながら色々魔法を試していた。

今は手のひらの上に浮かべたビー玉大の大きさの3つの土団子を眺めながら歩いている。

手のひらの上で静止している泥団子の1つに近くにあった適当な木に向かって行けと念じると発射され一直線に飛び木に当たってめり込む。

次に残った別の泥団子に同じように念じ発射したあと曲がれと念じるも目標の木に向かって真っ直ぐ飛んでいってめり込んだ。

どうやら遠隔操作はできないようである、できて手のひらの上だけだろう、方向性を付けられれば回避されずらくなるかと思ったがどうやら無理なようである。

そうこうしていると森の前方から叫び声が聴こえた。

(なんだなんだ?)

叫び声が聴こえた方に小走りで近寄っていく。

気の影響から覗くと少女が怪物と対峙している場面であった。

怪物は身長140cm程だろうか、顔はトカゲのような感じで赤く細長い下をチロチロだしながら手に生えた鋭い鉤爪を少女に向け二ミリ寄っている。

少女の方は腰を抜かしてしまっているのか尻餅をつき動けないようだ。

助けようか躊躇する誠慈だったがトカゲの怪物が鉤爪を少女に向けて振りかざしたのを見て、飛び出し呪文を唱えた。

「アースボール!!」

手のひらから打ち出されたバレーボール大の土の塊が弾丸となって怪物にぶち当たる。

誠慈の声には気づいた怪物も飛んでくるものの速さに対応できず腹にくらい土の塊と一緒に吹き飛ばされる。

「た、立てる!?!さあ急いで!!」

少女に急いで駆け寄ると手をつかみ脱兎の勢いで走り出した。

無我夢中で走った、少女と繋いだ手を離さなかったことは我ながら褒めてもいいくらいだろう。

ただ逃げた先がどっちの方角だったかまでは気が回らなかった、最初に異世界で目を開けた時と同じ、知らない森。

ふと手を繋いだ先の少女に目を向ける、肩で息をしておりますもう走れそうにはない。

「とりあえず場所の確認しなきゃね。」

一人呟くとタワーと唱える。

また100m程の高さの塔が現れ誠慈を空高くへ押し上げる。

「おお村はあつちか、これなら夜までには着けそうかな。」

ふと隣を見ると一緒に塔の上まで持ち上げられた少女が本日2度目の尻餅をついている。

(白か…)

そんなことを思いながら誠慈達2人は村に向かって進むのであった。

謝礼キター（前書き）

2・3話一緒に掲載しています。

謝礼キター

やっと村まで着きました。

ただいま絶賛軟禁中、おじさんと二人屋根の下だが、おっさんが好きな訳ではないしそんなプレイが趣味な訳でもない。

木窓から見える空は薄暗くなっていて、夜中までに村に着けたのは本当によかったと思っっている。

ただ村の近くまで来たところで多分少女を探していたこのおじさんに発見され、あれよあれよとこの部屋まで連れてこられたのである。

村の入り口からは左右をおっさんに挟まれて連行されてきたが、横目でチラチラ確認したところ村の周りには2重の木の柵のみ、家屋の数もそこまで多くなく15かそこら、人口60人程の村なのだろう。

ちなみに連れてこられた部屋は見た限り村で一番大きな家、といっても日本でいう少し大きめの2DKといったところか。

他は多分1Kとか1DK なのかな？

村の少女を助けた命の恩人なんだからもっとチャホヤされるかと思っただが、今のところどうやらそういうわけでもないようだ。

(おっさんと2人キャツキャウフフはもう疲れたよ…)

そんなしょうもないこと考えてたら部屋のドアが開き他の村人より

少し良い服を着たおじいさんが現れた。

（おっ、村長登場か？）

「この村で村長をしとるバークと申します、この度は村の者を助けてもらい有り難う御座いました。」

年の頃は50代半ばであろうか、多少白髪混じりだが顔もなかなか良く周りの者より少し良さげな生地を着こなしている。

村長が近寄ってくると右手を差し出してくる。

「いえいえ道すがら悲鳴が聴こえてきたので、駆けつけ助けただけです。」

（一応敬語を使っておくか…）

出された手を掴み固く握手をする。

（言葉は普通に通じているみたいだな、感謝されてるみたいだしお礼に期待してもいいのかな？）

「失礼ですがお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「あっハイ、私の名前は誠慈といいます。」

「セージ様ですか、セージ様は此方には何か御用事？」

バーグがセージの目を見ながら聞いてくる。

（セージか…まあそれでもいいか、それにしても結構警戒されてるのかな？）

「旅をしながら村を巡って見聞を広めている所です、何か気になることでもおありですか？」

「いえいえ、ただこんな辺境の何もない村に旅の方が来ることも希なもので気になり聞いてしまいました、不快に感じられたなら申し訳ない。」

バーグ村長が謝ってきたので気にしないでくださいとは一応言っておく。

「ところでセージ様、村の者を助けていただいたお礼なんです…」

（キター謝礼キター、金かカツコ良い装備とかか！？まあこの村のレベルじゃ鉄の剣とかそこらか……）

こちらでいかがでしょうか？

バーグ村長が手を叩き扉の向こうから持ってこさせたのは、あの助けた少女だった。

仕事を下さい（前書き）

一人称の確認のため1〜3話の文章を少しいじっています。
また今後の展開の為、村の規模を100人 60人に変更

仕事を下さい

(うーん…非常に困った…)

そうきたかと言いたい、たしかに助けはしたし謝礼も期待はしたが物じゃなくて者できますか。

謝礼としてバーク村長に差し出されたのは魔物から助けたあの少女だった。

「どうですか？年齢も16と若く気立ても良いですけど、ほら挨拶しなさい。」

「アビといえます…」

いやいや自己紹介とか止めてほしい、なんかもう貰う前提みたいに話が進んでるじゃないか。

「セージ様いかがされました？」

(いかがされましたじゃねーよ、大いにいかがしてんだよ！)

「いえ、急な提案でしたので…」

セージの口角がヒクつく。

「たしかに戸惑うこともあるでしょう、まあじっくり考えてみてください。」

バーグが笑顔で語りかけてくる。

いやたしかにアビという子、可愛い顔をしている。

背も150cm位と小柄で髪も茶色のロング、身体はほっそりしていて笑ったらもっと可愛いんだろう。

勿論今はうつむき下を向いてるので笑顔なんてこれっぽっちも見えないが。

「セージ様よろしかったら今晚は我が家に泊まっていかれてはいかがですか？」

「いいんですか!？」

アビのことなんて吹き飛んだ、今は宿の方が大事だよね!

「食事もまだでしたら一緒に妻に作らせますが？」

「是非よろしくお願いします。」

バーグからの提案に少し食い気味で返事をする。

「そういえばセージ様、お荷物はどちらに?」

「え?荷物……?」

ヤバイそういえば旅人設定なのに手ぶらだった、なんて説明しよう、うーん……

「魔物から助けた時に落としてしまったみたいです。」

「おお、それは申し訳ないことを……明日捜しにいかれるのでしたら村の男衆を手伝わせますが？」

「いえいえ、大したものは入ってなかったので大丈夫です。」

これで大丈夫かな？

一応ニツコリ笑っておく。

「ただ衣類と食料は必要なので幾分分けていただけると有難いのですが。」

「私どもの村も何分貧しいものでそう多くは差し上げられませんが、出来るだけのことはさせてもらいましょう。」

謝礼として払えるものが他にないからアビを出してきたのか。

「食料の方は保存の効くものを中心に選んでおきましょう、ですがセージ様が着ておられるような珍しい服となりますと我が村では……」

自分の姿を見て思い出した、黒のスウェットなんてこっちの世界にはないよな。

「村の方々が着ているような普通の服で構いません、旅に向けた丈夫な服なら尚嬉しいですが。」

この位の我が儘なら聞いてもらえるだろう。

「分かりました、では食事の準備ができましたらお呼びします、寝る場所はこちらの部屋をベッドもそちらのものをお使い下さい。それでは。」

そう告げると村長達は一礼して全員部屋から出ていった。

なんかドツと疲れた……

予想外の提案をされたんでなんか変に疲れたよ。

よく考えたら俺って変だよな、見たことない服着てるし手ぶらだし。

少女を助けるか躊躇ったけど命の恩人でもない限り怪しさ満載の俺なんか助けてもらえなかっただろう。

そういえばアビだっけ、あの子どうするかなー。

俺も男だ、女性に興味はあるし少女はゲットしたい。

ただ異世界に着の身着のまま来た俺には、生活する術もなければ資金もない。

そんな状態で誰かを養うなんてできないし、正直そんな責任はまだ背負いたくない。

18歳に色々求めないでほしい。

一先ず心を落ち着けるため椅子に座る。

深呼吸深呼吸。

少し休憩したあとバーグさんが部屋に服を持ってきてくれたので、それを着て村長夫妻と夕食を取ったのだが、バーグさんの奥さんに色々聞かれた。

出身やどんなところを旅してきたかなど。

決定的なボロは出した訳ではないが何かあるくらいには思われただろう。

多分……

そう願いたい。

というか飯くらいゆっくり一人で食べさせてほしい。

夕食のあとは寝る準備をし置いてあったタライの湯で体を拭きベッドで横になる。

やっぱり風呂なんてないのか、そんなことを考えながら目をつぶっ

ていると意識が深く沈んでいくようだった。

おやすみなさい。

そして朝を迎える。

天気は快晴気分は曇り、今日も元気だご飯が美味い。

ご飯が美味しいのに気分がくもりなのはきつと3人でとってるこの朝食のシチュエーションと解決していない報酬の問題のせいだろう。

ここでタワーとか使ったらこの雰囲気から逃れられるだろうか、そんな馬鹿な事を考えてしまう。

「朝食を食べたあとはどうされますか？」

「お金もなくなってしまうので、できれば何か仕事をして稼ぎたいのですが何かありませんか？」

お金は大事だよね！

「お金ですか、大きな村でもないのでもそんなに稼げるような仕事がないんですよ。」

「そうですか……」

うーん、しょうがないか。

旅人は滅多に來ないって言ってたしお金の回りも基本的に村内のみなんだろう。

旅人や商人が頻繁に行き来していないような場所では流通が悪くお金が入ってこないから、いざという時のために資金はある程度残しておかないといけないのだろう。

「多きな村や町へ行けば冒険者ギルドで魔物の素材を買い取ったり色々仕事も多いのですが。」

なんか今サラッと大事なこといったよね、村長さん。

「冒険者ギルドとは？」

「はて、セージ様はご存知ではないのですか？」

「あまり大きな町には縁がなかったもので……」

うう言い訳が苦しいがしょうがない……

「そうですね、冒険者ギルドは魔物や悪さをした者を退治する者達が集まる場所のようなもので依頼すれば私たちの村などへも来て退治してくれます。」

「勿論お金など対価を払わなければいけません、この村には自警団しかないため冒険者ギルドについてはそのくらいしかお話できませんが。」

なるほど、魔物を退治する傭兵のようなものか。

「お金の件ですが、物々交換は可能ですか？」

「何と何を交換でしょうか？」

この提案なら乗ってもらえるかな？

「魔物の素材とナイフを交換して欲しいんです。」

異世界で冒険者として生活することになりそうです。

恐怖とは案外身近なものである。(前書き)

お気に入りか7件にツッ

圧倒的歓喜ツッ

評価してくださった方もありがとうございます。

一人称は書き手の文により好き嫌いがはっきり分かれるとどこかで読みました、難しいものですね。

恐怖とは案外身近なものである。

朝食を食べてから30分程経っただろうか、現在村の中にあるオムラさんという人の家に向かって歩いている。

ナイフの交換の話をしたらこの人を紹介された。

村長さん家に呼ぶことも可能だと言われたが、朝食後の散歩も兼ねてオムラさん家に歩いて向かっている。

ちなみにスウェットはバーグさんの家に置いてきた、今は昨日貰った上下緑の服を着ている。

草かなにかで染めてあるのか若干色がまばらではあるが、この服装ならどこからどう見ても村人Aだ。

服の素材は詳しくないので分からないが防御力なんてものは無いことだけはたしかだ。

あと、ちょっとゴワゴワしている。

プラプラと歩いていくと目的の家に着いた。

着くまでチラホラ村人の視線を感じたりもしたが気付かないフリをした、面倒くさいので。

コンコン

「すいませーん。」

チャイムみたいなものは見当たらなかったの、日本式でやってみた。

合ってるのだろうか。

「何だ？」

ドアが開いて出てきたのは昨日バーグさん家でキャツキャウフフしていたおっさんだった。

正直今すぐそのままムーンウォークでもして立ち去りたい。

「えっえーと、村長さんにナイフが欲しいと言ったらオムラさんという方を紹介されたのですが……」

「私がオムラだ……入れ。」

これはあれですね、入った瞬間俺のテリトリーに入ったな死ねええケケケケケというやつですね。

「何をしている。」

「ハイツツ!!」

恐る恐る入ってみると中は案外普通の造りだった、必要最低限の物しか置かない質なのかどこか殺伐としている。

「どんな物が欲しい？」

「えっ？」

「ナイフだ、どんな物が良い？」

そうだ、ナイフを貰いに来たんだった。

「魔物の皮を剥ぎ取れるようなナイフが欲しいんですが……」

無言で奥の部屋へ行くとオムラさんが1本のナイフを持ってきた。

ナイフが鞘から抜かれ刀身が現れる。

綺麗だ。

単純にそう思う。

ナイフ自体は所持者らしく武骨なナイフだ、柄も特に凝ったデザインがされている訳ではなく、布みたいなものが巻かれ使い込まれて

いる感が半端ない。

刃も肉厚なのだろう、包丁くらいしか扱ったことはないが用途が違
うんだろうという事は分かる。

ナイフをポーッと眺めていると、オムラさんが刃の方を掴み柄をこ
ちらに向けてくる。

無意識に柄を握ってしまっていた。

「何と交換する。」

「お前は何を払う。」

ハツとして手を引っ込める。

手を引っ込めたまま固まっていると、オムラさんがナイフを鞘に仕
舞ってしまった。

「刃物には持つ為の資格がいる。」

「お前はこれを得るために何を棄てる。」

「う……………」

答えられなかった。

問いの意味が分からないとか何を言えば正解とかではない、答えら

れなかった。

まるで魂に向けて問われているような感覚だった。

手のひらは汗でびっしょり。

今まで味わったことのない感覚だ。

オムラさんが前を横切るとドアのぶに手をかけドアを開く。

どうやら帰れということのようだ、促されるまますすぐこと外へ出てしまった。

背中ドアの閉まる音を聴く。

村の門から出ると少し行った所で座り込む。

「クソツクソツなんだあれは!!」

今頃になって手が震えていた。

絶対あのおっさんは普通じゃない、何かは分からないがヤバいのだけは理解した。

深呼吸深呼吸、落ち着け俺。

今は村の近くとはいえ森の中だ、村から遠く離れなければ比較的安心だとバーグさんは言っていた。

ただあくまでも比較的、森の奥と比べたらってことで絶対ではない。

ふと辺りの様子を伺う。

森の中は静まり返っている。

葉の生い茂った木々により太陽の光が完全に遮られているわけではないが、所々薄暗くはある。

突如目の前の草むらからあのトカゲの魔物が出てこないとも限らない、こう考えている間にも背後から近寄ってきているかも……

「ああああウダウダ言ってもはじまらない!!」

ナイフは得られなかったが魔法は使えるんだ、いくぞ俺G O !!

とりあえず前に進む、前進前進。

つと緊急停止つ。

30 m程先だろうか、何か動いた気がする。

気のせいかもしれないが何かきになる。

木の影に隠れながら慎重に近付いていく。

あと10 m程か、段々動いていたモノの正体が見えてきた。

なんだありゃ……ってかあれってなに……

グ
チ
ャ
グ
チ
ッ

恐怖とは案外身近なものである。（後書き）

ナイフは一振りとは言わないらしいですね、調べて知りました。

最初ナイフはすぐ貰って魔物討伐でも行こうと思ってました。

ただ書いてくうちにああ服着替えさせなきゃとか新しい服の描写もいるとか考えてると話が全然進まない状態です……

書きたいものは他にもたくさんあるので皆さんポイしないで（ry
伏線は意識して幾つか張ってます、上手く回収できるように頑張りたいところです。

あと、この作品ではないのですがもう一本書いていまして、更新できていなかったゴブリンの話しも近いうちに投稿予定です。

そちらもよかったら暇潰し程度の気持ちで読んでみてください、では。

村長の考え（前書き）

村長の思惑になります

村長の考え

村から飛び出し行方不明になっていたアビが無事帰ってきた、どうやら魔物に襲われていたところを旅人に助けられたらしい。

搜索に出ていた村の男達へカンカンと発見の合図の音が鳴らされている。

旅人は私の家の一室に待たせてある。

一応素性が分からないので村でも腕利きの猟師を見張りに付けている。

帰ってきたアビから話を聞くと助けた旅人は魔法を使っていたらしい。

曰く、一瞬にして空高くそびえ立つ塔を作ったのだとか。

旅の魔法師の方なのであろう。

魔法師は強力な魔法を行使するが絶対数が少ない、私自身魔法師を見たのは一度しかない。

あの時は村の近くにサーベルビットの集団が出現し、魔物を退治してもらおうよう冒険者ギルドに依頼したのだった。

その時魔法師が1人、パーティーにいたのだ。

あの時私は村長になる前でまだ若く青かった、好奇心が勝ち危険を

承知でコツソリ冒険者達に付いていったのだ。

森の中へと移動しそこで見たのはまさに衝撃の景色だった。

冒険者達がサーベルラビットの群れと遭遇し、魔法師が手を前に突き出すと突如前面が氷に覆われたのである。

魔物と共に木や草までもが凍っておりまるで氷の彫刻のようだった。

あまりのことに腰を抜かしていると魔法師がこちらへと歩いてくる。

これからは危険だから村へ帰って欲しいと言われた。

私は急いで帰った、魔物にはなくその魔法師に恐怖したのかもしれない。

それほど衝撃的な映像であり怖くもあつた。

それから時が経ち私も年を取った。

たった一度の出会いであつたが、私も様々なことを経験しあの力が恐怖であると共に大きな魅力であることも分かった。

村でも数年に何人か魔物により死者がでる、もし強力な魔物が森の奥から現れれば私達は逃げ惑い死ぬことしかできないのである。

だがそれに対抗できるかもしれない存在が今村にいるかもしれないのだ。

もしその旅人が村に永住してくれれば、村はより安全になり人も増え栄えるだろう、村長として私自身としてもそれは歓迎すべきことである。

アビの話では魔法師は青年なのだとか、アビにも話をつけ結婚させようかと考える。

結婚すればこの村に永住してくれるだろう。

アビは私が育ての親であり本当の両親は小さい頃に魔物によりに殺されており兄弟もいない。

アビも自分を助けてくれた命の恩人には引かれるものがあるだろう。

早速魔法師の方と会うことにする。

たしかに見た目は若く普通の青年だった。

ただ一番妙に感じたのは服装である。

青年は奇妙な服を着ていた。

上下黒の見たこともないような服なのである、裁縫はしっかりとしているし高級品なのは分かるがどこかの民族衣装なのだろうが初めて見るものだ。

アビの件はいまいち良い返事は聞けなかったが、とりあえず泊まっていくなかった。

服の他にも奇妙な点があった、この青年手ぶらなのである。

荷物のことを聞くと魔物との遭遇時に落としたと言っていたが、はたして塔を造るほどの魔法師が荷物を落としてきたりするだろうか。

予測でしかないのですがまだ信頼しきる訳にはいかないだろう。

ナイフが欲しいと言ってきたので獵師を紹介した、旅を続けるためにお金が欲しいようので仕事を探していたがそのまま村ですつと働いてほしい。

幾つか手をつっておかねば……

村長の考え（後書き）

昨日は旅行にいったため急ピッチで書き上げました。

書いててそういえば靴はいてなかったと気づいたので後々修正予定です。

お気に入りか8件に！ありがとうございます。これからもよろしく
お願いします） *・・（ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3644y/>

はい、私が噂の変態土魔術師です。

2011年11月15日13時19分発行